

---

# コンビニ！

水日子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

「PDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

コンビニー

### 【Zマーク】

Z3623Z

### 【作者名】

水口子

### 【あらすじ】

「あのさ、そりやあさ、ここはコンビニだよ?」コンビニデスヨ?  
? んでもって俺が思うにコンビニ店員にこんな業務が課されたことは過去一度もないような気がしなくもないような気がするんだよね「何言ってんだ、コンビニ、つまりコンビニエンスストアもどい便利屋の使いパシリが」「いやふざけんなや死ね」「おまえが死ね」そんな感じで送るコンビニハートフルコメディー……になればいいな!

矢部千之助。今をときめく一十七歳おとめ座彼女ナシ。趣味はプロレス鑑賞（特に女子）、夢は……まあとりあえず今月の家賃さえ払えればいいや。

「らつしゃいませえー」

そんな僕ですが、職業、コンビニ店員八年目のピチピチ新人です。

「……いや、いやいやいや。八年目つてアンタ、どう考へても新人じゃないよ大ベテランだよついでにピチピチでもねーよ」

「うつせーな黙れよ水虫ハゲ」

「ハゲてねエエエ！」

「水虫は否定しないんだあ。へえ、ふつうーん」

「ぐッ……」

Hーート「ちらはフクテン」と副店長の内田サン。内田……Hーート、内氣サン。

「んなわけねエだろオオオ！ 内田内氣つて俺生まれた瞬間から両親にどんな恨み買つてんの！？」

「チツ、うるせえな。じゃあ強気さんでいいかよ」

「何がいいの！？ ねえ何がいいの！？」

あーもう本当うるさい。これで副店長だつて言つんだから世の中つてのは間違つてゐつてしみじみ思はざるを得ない。この先この人が店長にでもなつてみる、俺は首相にでもなつてるところだ。んでもつて汚職で叩かれてるところだ。そつじやなきやおかしい。

「いや、おかしいのはそれを本人の前で口に出して言つたの神経のほうだよね？ どうしてくれんのコ。どうしてくれんのおじさんこの軽くな」トライウマ。この心の傷どうし

「オイ」

「あ？」

「へ？」

突如割り込んできた、ねじ込むような気配の声に、二人は同時に振り向く。視線の先には、どう見てもコンビニの人間ではないスースの男。ちなみに千之助たちがたむろしてるのはレジの奥にある防犯カメラや商品受注をかねた管理室だ。つまり、スタッフオンライン、というやつで。

「……オーライ、オイオイ何やつてんスかお密サマー？ こにはあんたら愚民が立ち入つていい場所じゃねえんだよ、『ぐぐぐく限られた選ばれし人間のみしか入ることを許されないわば……』

「ちょつ、ちょつとオオオ、何言つてんのオ矢部くつひくつん？」

？」

「何つて愚民に常識叩き」

「違うよね、違うよね、うつかり口がすべ……じゃなかつた、声が裏返つちゃつただけだよね！？」

「声が裏返つたつて俺どんだけあがり症よ」

「そつだな」

直後、内田サンの顔がはつきりと硬直した。

『……オーライ、オイオイ何やつてんスかお密サマー？　ijiはあんたら愚民が立ち入つていい場所じやねえんだよ、『jぐぐ』へ限られた選ばれし人間のみしか入ることを許されないわば……』

『ちよつ、ちよつヒオオオ、何言つてんのオ矢部くつひひひつさー！』

？』

男がおもむろに背広のうちポケットから取り出した黒い物体。何だ？　炭化した食パンの切れ端か？　と思ったのも一瞬、男の手の内にすっぽり収まるソレは、前触れなく喋りだしたのだ。千之助と内田、両方の聲音をそつくりそのままに残した音で、聞き覚えのある　ありすぎる台詞を、一語一句、間違いなく。

「管理室を開け放してべらべらくちやべつて職務放棄も甚だしい拳句、買い物客にこのよつた罵詈雑言。しかるべき機関に提出すればしきるべき措置が取れる内容だな」

ふん、と面白くもなさそつに手中のふざけた野郎を見下ろして、男は不遜に顎を上げた。丞先は、

「え？　え？　え？　H H H ! ?」

田を白黒させた内田サン。駄田だこつや。

「じいなんです、じいぢやうあなたはコイツより上の役職についているようだ。正社員なんだろう。アルバイトにどんな教育を施していのかぜひとも伺いたいところだ」

「あ、う、えつと、その、」

「はつきりおっしゃつてください」

「あー駄目だ、これは駄目だ。この人メンタル弱いから。ちびこちゃんの山根君の胃腸並みには弱いから。昔いれたつていう肩の刺青だつて、課長のヅラを告白するぐらいには決死の覚悟だつたつて言つてたから。駄目だから。この人に言葉攻めとかホント、見てよ、ちよつと目尻に見慣れない水滴が溜まつてるじゃん。

つーかこのままだといらんこと言いそうだしな、主に俺の勤務態度とか勤務態度とか勤務態度とか。

しゃーねえ、面倒だけど適当にだまくらかすか。

「とひやま」

重い腰をやつとこを上げて、開いた千之助の口はそのまま口笛の形をかたどつた。ピコウツと固まつた空気にそれは場違いなほど軽快に響く。

「何？ あんたまさかのガキ持ち？ いや一人は見た目に寄らないねえ」

か細い声の音源は、管理室の敷居の前で立ち踏みする黒田がちな目のかわい少女。いや、五、六歳に見えるから幼女のほうが正しいのか、と腐つたことを考える千之助を尻目に、先ほどまで悠々と内

田を追い詰めていた男の顔が見る間に渋いものになった。

「俺の子供じやねえ」

ぞんざいな言葉遣いは男の素なのか、不機嫌そうな咳きこすかさず千之助は飛びつく。

「え？ あんたが孕ませたんじゃねーの？ つーことは何？ おたく様の子供に父さま呼び強要してんの？ え、まさかの変態？ 変態来店？ スミマシセーン当店、変態変質者の来店はご遠慮願つております」

「んなわけあるかアアア！ 僕だつて知らねえよこんなガキ！ いきなりついてきやがつて、おかげで事務所にも行けねえよ…」

「あのー、あんま大声出さないでくんない？ 他のお客様の迷惑になるんじゃー」

突如吼えた男にダルそうにストップをかけるため、顔を覗き込んで、そこで千之助は気付いた。

男の目が爛々と危うげに輝いていることに。

ヤベ、と思つたときには既に胸倉を掴まれていた。

「……あいにく客は俺とのガキしかいねえよ。よかつたんじゃねえか閑古鳥が鳴いててよ。そりやサボりがいもあるつてもんだ、なあ？」

「オーライ内田やーん、これ撮つて写メでいいから撮つてー」「黙れ」

無氣力に過ぎる救援は低い声でもつて一刀両断される。男はほとんど同じ身長の千之助の襟首をことさら強く締め上げた。男同事と

「クビにされたくなかったら黙つて面ア貸せ」

「クビにされたくなかったら黙つて面ア貸せ」

恐喝に近い、というか完全なる恐喝に、千之助の眉がピクリと跳ねた。自分の胸倉を齧掴む男の手首に力を入れる。そうするとわずかに締め付けが緩んで、その隙に千之助は男の膝裏に足をかけた。

「つおつーー？」

男の状態が傾ぐのを無感動に見遣つて、未だに外れない男の右腕を捩じ上げた。ぐ、と男の口から苦悶の声が漏れる。

「なあ」

ダン、とコンビニの冷たく固い床に叩きつけられた身体の上に馬乗りになつて、千之助は笑う。男は一度、ひどく険しい色をその端正なつくりの顔に浮かべたが、すぐに唇を引き結んで目を逸らした。

「ちょ、矢部くん！？ 別にそこまですることでも……」

「なあ、お客さん」

千之助はいつそ優しくような声色で言つ。

「コンビニってのはな、レジに並んで所定の料金払えばなんでも買えるんだよ。誰でもな。キャピキャピのJKでも、ピチピチの女子大生のネーチャンでも、ウツウツの育児疲れの三十代でも、ガタガタのバーサンでもな」

「いや、矢部くん、それ女人限定じゃん」

「ほれ、こんな水虫だらけのオッサンでも副店長張れるコンビニだ。」

何をそんなに焦つて買つよ？ 下痢止めか？ 悪いがソイツは薬局  
だからな、探してんなら地図でも書いてやるつか？」

「ちよつと矢部くん、いい加減おじさん怒っちゃうよブツツンしち  
やうよ？ 水虫移しちゃうよ？ いいの？ ねえいいの？」  
「……の元へせ」

「あ？」

喧騒（主にフクテン）の中、男の脣がかすかに綻んだ。千之助は  
身をかがめて声に耳を澄ます。が、

「だいたいさあ、君の接客態度はいい加減目に余るというか、俺の  
やる気までそぐというか、いや別に俺にやる気がんのかと訊かれ  
ればなんていふか、事務所を通してくださいとしかいえな」

「ちよお、黙つて」

「ぐおつ！？」

内田さんの心の鬱屈の発露があんまりつるんで、千之助はつい  
に男の左手に收められていたボイスレコーダーを投げつけた。黒い  
放物線を描いた物体は、吸い込まれるようにして内田の口にはめ込  
まれた。

「フガモゴ、フガガゴ」  
「よし」

不鮮明な唸り声をあげる己の上司に、千之助は満足そうな溜息を  
漏らすと、「さて」と男に向き直った。相変わらず視線は合わない。

「で？ なんだつて？」

改めて問いかけると、男は再び唇を噛み締め、やがて双眸に挑発を載せて千之助を睨み上げた。

「べいべいひるせーんだよ、てめえ。レジでおとなしくもできない野郎が、まあ口だけは達者だな」

クビになりたくなきや、とひととじむか。面倒くせむつて顛をしあくつた男に千之助も負けじがらか面倒くわざつに答へる。

「わいきから聞いてたらクビくじつよオ、向それ齧してのつもり？」

「ああ」「であると懲つてんの？」  
「であるわ」

千之助は「」のとおり、初めて男の笑みを見た。

「本職舐めるなや、小僧」

もつ一度言ひ。ひけ。男はやはり面倒くせむつて軽く頭を振りながら千之助を押しやる。の職場が好きなら即刻どくんだな

「アンタ、こつた」……

「俺は、おまえらが散々相手してきたクレーマーとは違うぜ。やるつづいたらやる。」の職場が好きなら即刻どくんだな

千之助は無表情に目を眇めた。空いた手で軽く拳をつくる。慌てたのはいわずもがなフクテンの内田だ。

「フガツ、フガガ、フガグゴ」

塞がらない口に四苦八苦しながらも仲裁に入らうとする。当然だ。勤務時間内に暴力沙汰なんか起こされたら自分のクビも間違いなし。一応これでも衣食住が何とか保証されている明日は惜しい。つーかこれ、矢部くんの未来ある明日だってかかつてんだからね！ と自らを奮い立たせながら諭すものの。

「いや、俺フガガガ語とか習得してないから。履歴書になかつたでしょ？」

すげなく扱われた。

「フガツ、フガガガガガガ！（いや俺だつて習つたことねーよふざけんな！）」

「……やるつてのか？」

「おうよ。やるつたらやるのがテーマの専売特許だと思つなよ」

「おもしれえ」

「フガツガ、ゲゴ、ゲエエエエエ！（ちよつと聞いてるー？ う、げげ、なんか入つた！）」

「とりあえず一発な」

「後悔すんなよ」

「そいつは食らつてから言えよ」

「ガフ、フガアアアアアアアアア！（だから駄目だつつってんでしょオオオオオオ！）」

千之助の腕が持ち上がった。千之助と男、どちらにも躊躇いがない。千之助が本気で殴つて、男は本気で自分たちをクビにさせるだら。

あ、終わったコレ。内田の頭は自然と公的扶助の申請手続きの流れに入る。自分でも分かってる、完璧なる現実逃避だ。内田は投げ

やりに後ろの防犯カメラのモニターを凝視することにした。

だから、気付かなかつたのだ。男も千之助も内田も。誰一人として、気付かなかつた。

扉の段差をまたぐ、小さな影を。

「はい、いち、このわー」

「だめ」

「ん？」

服の裾が引っ張られる感触に、千之助は思わず目を斜め後ろに落とした。かち合つた黒目がちの瞳。

「おま、」

千之助は絶句する。

「どうせま、きずつけたら、だめ」

「……オイ、」

男もようやく事態が飲み込めたようだ。目がこれ以上ないほど見開かれる。

「だめ、ゆこー、ゆるせなー」

「えつと、」

「とつわお」

「……ッ」

「……ッ」

言葉に詰まつた男に、少女は嬉しそうに破顔する。男の口が酸素を求める金魚のようにはく、と動いた。

そして少女は呼ぶ。とうけるように甘く、甘く。

「とひやま」

「フゴオオオオオ！」

呆然とした空氣の中で、少女の疑いを知らない声と、内田の歓喜のむせび泣きだけが虚しく響いた。

「……で？ マジでアンタの子供じゃないわけ？」

「違う」

間髪入れずに悉々しき息を吐いた男に、千之助はがりがりと首を搔いた。

はぐ、と口を開いたきり、何も発さない男。とうさま、と呼ぶ少女、ゆいこと言つていたが、はやはり幼げな笑みを無邪氣に彼に向けたまだ。そんでもつて鬱陶しい内田のフガフガ語。

收拾がつかないつーか、ただのカオスだ。何これ。何この状況。どうしろってんだこの気まずさ。

アレか、裸踊りか？ ともちらと考えたが、外したときの周囲の大気圏外的な雰囲気に耐えられる自信がないので却下する。内田サンじゃないけど、白けた視線つて人を灰にすると思うのだがどうだろう。

とりあえず。

「アンタ、ちょっと来て」

己の下に敷いていた男を立ち上がらせる。そのまま襟首を、先刻の男と変わらない力強さで引き摺った。

「は、なつせ」

「どうせおー」

「じゃあ内田サンはその手覗とこでねえ。くれぐれも逃がすんじゃねーぞ」

「「「？」 ハハハー？」（え！？ 僕ー？）」

「そんじや、オーネサンにはちょっとくら話でも聞かせてもらいましょーか」

追い縋るつとする少女のアフターケアは内田に任せ、千之助はさきつぎつとこちらを睨みつける男ににじつ営業用スマイル。

「閑古鳥の鳴じてゐる鶯なコンビニで助かつただの？」

じゃなきやアンタの話なんか聞いてる時間も惜しいもんな。

抵抗がやんだ。

「……嫌味か」

「やつ思つてこつのは、心当たりでもあんの？」

緩く問えば、男は口の端を歪める。千之助のような、会つて間もない人間でもこれがこの男の地であると納得する、浮かべ慣れた感のある獰猛な笑みだつた。

「ねえよ」

……まつたく。

悪びれなく驟くとも少し、苦笑した。接客業も樂じやないのだ。

やうして、店の裏口まで引っ立てた後の畠頭の会話とあこなるわけである。

「実際問題をあ、ついてきたつて、どんな風によ？」「どんな、つて……まんまだよ」

十月のやや肌寒い風に一人して吹かれながら、質問を吹っかけてみる。出掛けに少々拝借した煙草の紫煙は強風に煽られてすぐに消える。

男は口元に同じものを咥えて、疲れたように前髪をかきあげた。露わになつた額に、思つたより口イツ若いんじやねーの、と思つ。

「正直、思に出したくもねーが、そう、だな、三日前の朝のことだ、

」

男が言つたは、三日前の朝、いつもと同じように職場に向かう歩道橋の途中でいきなりトロトロ後ろを歩かれたのが始まりだという。とつあま、と呼ばれて、スーツの裾を掴まれたらしく。当初は誰かと勘違いしてゐるかと思ってできる限り優しく（といつてもこの男のことだからどこまで本当のことだか怪しいものだが）振りほどいた。が、それでも懲りないのでその日は撒いてきたのだという。

一日目。すっかり昨日のことを忘れていた男を少女は待ち伏せて、そして今度は手を繋いだ。

「なんでそこでうつかり手を繋いじゃつかなー」

「うつせえよ、俺の過失じやねえ」

話によるとまず最初に、ヒツカマ、と満面の笑みで駆け寄つて、自分がやんわりとその身体を押し遣るつとすると田に涙を溜めて泣き出したらしい。朝の忙しない歩道橋の真ん中で。なるほど、さすがにそれはいたたまれない。

それでやむにやまれず手を繋いだが、これでもヒツカマから見ても父子の図である。おそらくそのお綺麗な顔を苦虫百疊ほど噛み潰した感じでいろんなところを訪れたのだろう。交番を皮切りに、区役所市役所エトセトラ。もしかしたら近くの幼稚園や保育園も手当たり次第に当たつたのかもしれない。

けれどその度に同じ手を使われ、冷たくあしらわれたのだろう。確かにこの歳の少女を持つには若い。おおよそ、どうしても仕事場についてきてしまうからあずかつて欲しいがための詭弁だと思われたに違いない。俺だつてその役人と同意見だ。あの顔を見るまでは。

少女から向けられた笑みに、声に、滑稽なほど呼吸の浅くなる男のあの様子。本来なら好戦的に光を放つのだろう双眸ににじませた恐れの色。

あれが演技だつていうなりこつそ役者に転身しろ。

「つーかもう職場までつれてくつー選択肢はなかつたの？」

「馬鹿言え。殺されるわ」

「それはおまえが？ それともあの子？」

「どっちもだよ」

「どうやらお世辞にも素敵な仕事環境とは言えないらしい。」

「まあ、そんで、一日終わつちまつて、そしたらあんのガキ、なんてほざいたと思う？」『あそんでくれてありがとう。やっぱり

「うそままはやさしいね』だとよ。大人舐めやがつてチクショウ」「尾行はしなかつたの？ 家割り出せるじゃん」

「したさ。まあ早々気付かれて……これ以上は思い出したくねーな。とりあえず捕まりそうになつた」

「おおひ……」

「俺ア、絶対アイツの父親に一発ぶん殴つてやるつて思つたね」

「それで、今日は父親探してたわけだ」

「まあ、な。敗色が濃いのに変わりはないが」

それで昼食がてらにコンビニ寄つたら店員がいやがらなくつて以下略だ。

気持ちよさそうにケムリを吐き出す男に千之助はつーん、と我ながら運の悪さに同情を禁じえない。相手としてはおそらくその一端を担う千之助にだけは同情されたくないだろうが。

「つーことでだ」

「あ？」

「俺はアイツの父親を探し出さなきゃ、出勤できん」

「そうだな」

「そしてこの広い街の数多の人間からただ一人を割り出すのは無謀に近い。つーか無謀だ」

「そうだなあ」

「俺だけでは膨大な時間がかかるだろ？」「…………」

「しかし」

待て、何だこの嫌な振りは。初対面の人間に対する前置きとしては史上最悪だ。

「一人だつたら単純計算で一日が半日だ」

「ソウデスネ」

「労力も半分になる。違つか？」

「マッタク」

「と、いふことだ」

「どういふことだよ。勝手に血口完結すんな訴えんぞ。」

「今が血の一時。アイツが帰るのは五時過ぎだ。それまでに父親を見つける」

「そうか、頑張れ」

「そうだよ、頑張れ」

煙草を壁にすり潰し、くるりと背を翻した千之助の肩に、がしりと負荷がかかる。

千之助は恐る恐る背後を窺つて、そして次の瞬間後悔した。

好戦的な鋭い目。オイオイの怯えはびりしたよ返せまだあっちのほうが可愛げあるわ。

「何をそんなに焦つて買つよ、だつける？」

「……嫌味デスカ」

「心当たりでも？」

「ないですねええまつたく欠片たりとも！」

「そいつはよかつた」

そして何を隠そう男の顔に貼りついていたのは一分の隙もない営業用スマイル。何おまえ結構根に持つタイプなの。

ひとまず腹いりしおりえが先だと、気乗りのしない男を無理やり管理室まで戻らせる。

案の定、大して時間が経過していないにもかかわらず、無機質な室内で異彩を放つ泣きそうに大きな目を潤ませている少女と、それ以上に泣きそうつーかもうアレは半泣きじゃねーの？

内田サン。オンナノコはともかく、内田サンつてばホント期待を裏切らない人だよなあ、と、反応に困るシチュエーションで半ば逃避じみたことを考える。

「えーと……」

這つてでも「どうでも」のもとまで行こうとする少女と行かせまいとする内田サンの図ははつきり言わなくとも犯罪者の図だ。幼女誘拐の現行犯逮捕だ。何をどう声をかけたらいいんだろーか。と、もみくちゃになっていた少女の視線が、ついにこちらに及んだ。

果たして彼女は無垢な表情で笑う。

「どうでもー」

瞬間、隣に並んだ肩がびくりと左右に揺れた。あーあ。千之助は肩を竦めて横目を走らせる。

男は、表情筋は出張ですか？と思わず尋ねたくなるような能面だった。大の大人にたつた三日でここまで苦手意識を植え付けるなんて、男とさして歳の変わらない千之助としては若干複雑な気分である。

「とつわまー」

「あ、わよひー。」

男を確認して、俄然やる気が出たのか、少女はあつわつと内田さんの包囲網を潜り抜けた。何の他意もない風な笑顔で男のところまで小走りに駆け寄った。隣の千之助は華麗なまでにスルーだ。未恐ろしい子である。

「とつわま、とつわまー ゆこーおなかすいたー 『はんたべたい、たべよー』」

「……シ、あ、」

「とつわまー」

「あ、ああ。そ、だな……」

我に返つたように返事する男の迂闊さに千之助は舌打ちした。ガキを見た目だけで判断するなんて、本職弁護士と名乗っていたわりには意外に甘い野郎だ。この少女と大差ない年齢でもそれこそアイツなら、千之助は軽く頭を振つた。その先に続く名前など思い出したくもないし、今後も思い出すつもりはさらさらない。

「そ、うこやアンタラメシ買ひにここに来たんだ？ わたしと会計済ませてよ」

助け舟を出すのは本人の意図するところではないが、結果的に出したような気がしなくもない台詞をけだるそつに放つて、千之助は男に無理やり視線を合わせた。男は助け舟の意味をあやまたず把握したらしく、そいつらの頭の回転の速さをさすが本職、とつべきか。

じゃ、オーランたちはちょっと君の『』はんゲットしていくから、とおざなりに言い捨てた千之助に、少女は当然の『』とく反

駁した。

「ゆいこもー ゆいこもこくー。」

「だーめ」

柔らかく、けれど断固とした色を奥底に沈ませて、千之助は笑む。

「俺らついでに二口チン吸つてくるからさあ、子供は連れて行けないんだよね。君のお父さんだつて誰かに注意されちゃうし」

大人の特権をちらつかせて、どざめに「子供」の一言で釘をさす。保険で「どうさま」への迷惑もほのめかしてみる。そうするとたちどこにいぐ、と反論を飲み込む少女に千之助はやつと可憐げが見えた気がして、くしゃりとその頭を撫でた。睨まれた。チクショーカ愛くねえ。

「ま、そーゆーことで。頼むよウツチー」

頬を分からぬ程度に引き攣らせたまま、みずからの副店長の背中を何気ない仕草で叩く。はまつたボイスレコーダーを取り出そうと奮闘する内田は気付かない。それを狙つてやつたのだと糾弾されればそれまでだが。

「ゴ、フガ、フゴガツ、あ、外れた」

外れたアアア！ あーもうほんとアイツクビにしてやうつかな仮にも俺つて上司だよ上司にトゥルー・ザ・ボイスレコーダーつてこれだから最近の子は……。

怒涛の勢いで喋りだして振り向いた先。視界に映るのは最近の子

の中で文字通り最も歳若い子で。

.....

見つめあつ」と數十秒。

「…………ああああああああああんのやい、絶対クビにしてやるわ かわわ

2

その頃。

千之助と男は既にコンビニをあとにしていた。まあ、千之助が男の腕を引いているという極めて一方的なものであるが、とにかく抵抗されているわけではないから同意だということにしておく。

男の様子を鑑みるに、あの少女と同じ空間に一緒にいたにするのはどうもまずい気がして、気付いたら外に連れ出してしまったわけだが。なーんか早まつたよね俺。コレ、話し聞く態勢だよね。完璧この件に関わりますフラグ立つてるよね。やべーよおいこれはやべーよどれくらいやばいからマジやばい。今こじでちがーよ、別にてつだわねーよって断つてもさあ……シンデレだよね？ ここの段階まできたらいわゆるシンデレなあの方でしかないよね？ よくあるよね、シンデレ美少女と主人公のラブとかさあ。つかコレ俺が主人公だからね。ヒロインじゃねえからね。性別違うからね。

徐々に脱線していく千之助の思考と反比例して男は不気味なほど

に静かなままだ。それが逆に恐ろしい。かといって迂闊にこちらから口火を切るものもいただけない。なんたって相手はその道のプロだ。白を黒に、黒を白にする輩だ。様子見に徹することに決定した千之助の脳内会議の結果は、迅速に神経を駆け巡る。常日頃天邪鬼を遺憾なく発揮する口も、危機には敏いのか綺麗な一直線を描いている。寒々しい枝を覗かせる木々も、澄んだ高い空にも見向かせず、無言を保つたまま一人は歩いていく。

「オイ」

重苦しい沈黙を破つたのは男のほうだつた。赤と青の毒々しい配色のコンビニが見えなくなつてから、ためらい気味に口を開いたのが、不思議と前を向いていても分かつた。初対面時の第一声と同じ台詞。しかしそこに秘められたトーンはずいぶん違う。最初のふてぶてしい響きと違い、その声は困惑の気配をひどくにじませている。

「聞いてんのか、おまえ」

千之助は答えない。

「オイ、おまえいいかげんにしろよ、」

「矢部」

芳しい反応を返さない千之助に焦ってきたのか、困惑とためらいを足して一で割つたような声音はあつという間に低くなつた。そして千之助はそれよつとさらに低い声で言つのだ。

「矢部千之助」

「……あ？」

「だから、矢部」

「や、べ？」

「そ」

俺の名前だよ。

「矢部、ねえ……」

「いつまでもあんたにおまえ呼びされるのもな。かあいの女の子ならやぶさかじやないけど」

「阿久津」

「はん？」

「阿久津昌秋。俺だつていつまでもおまえにアンタ呼びされるのはごめんこつむるね」

「……喧嘩売つてんの？」

「さあ？」

どうも男 阿久津と名乗つたが、千之助としてもあんな挑発をされた以上彼を名前で呼ぶ気はもはや失せに失せたが は何が逆鱗に触れたのか知らないけれど、妙に苛ついているようだった。

「何？ なんか怒つてない？ 僕悪いことでもした？」

「別に」

「それにしたら、なーんか言葉尻が刺々しいと思つんですケド」

阿久津はそこで、ぴたりと歩みを進めていた足を止めた。自然と千之助も立ち止まることになる。太陽が中天よりやや西に傾いたこの時間帯、少し幅広の歩道で、男一人が突つ立つていての光景はさぞかし奇異に映るに違いない。

動きを停止した阿久津は、刹那の間の後、いきなり頭を搔き鳩を剥いた。これにはさすがの千之助も目を剥く。

「え！？　え、ちょ、何、何なの突然」

「て、」

「て？」

「テメHのせいだらうが！」

「はあ！？」

「怒つてないか、だと？　ああ怒つてゐるよ怒つてゐるを怒つてゐるとも

！　全部まるつとおまえのせいでな！」

感情のメーターが振り切れたみたいにものすごい形相でまくし立てられた。え、何俺何の逆鱗に触れた？　眞面目に身に覚えがないんだが。

「え、と」

「俺が！」

いきなり詰め寄られた。ちょっとオイ、やつとの思いで奮い立たせた俺の勇氣どうしてくれんの。

心中でたらたらむつけるも、それを今のこの男に面と向かっていふ気はない。つか言えない。怖くて。

イケメンつつーのはキしててもイケメンなのな。あ、なんか耳の下にほくろある。妙な感心をしているうちにコイツの出所のさつぱり見当のつかない怒りも沈静してくれないかと淡い期待を抱いてみるが、よくよく考えてみたら俺の人生において期待とか希望とか名のつくるのはだいたい叶わなかつたなチクショウ神は死んだ！

「俺が！　この俺が！　一般人相手に先を越されるなんざー！」

阿久津はそこで一皿ぜえはあと息を継いで、うつむきながら恥だ汚点だなんやらだとぶつぶつと呟くと、再びきつと顔を上げた。

「くそもつねまえはとりあえず死ね  
「エエエエエエエエエ何この理不尽！」？」

一泊遅れて理解した千之助は、彼の目が真剣な光を宿しているのを見て取つて、小さく頬を引き攣らせた。やべーよコイツぱりぱり本気だよ。

「ねえ……」  
「……」  
「あのや、」  
「……」  
「うん……確かに落ち込む気持ちも分かる気がしなくもないような気がしないけどさ、」  
「いやそれ結局分からんじゃねーか」  
「そこだけやたら突つ込むのね。うん、もうなんかどーでもいいわ

それから十分後。どうしてだか千之助にもさつぱりだが、二人は小さな公園のベンチに並んで腰掛けていた。ブランコと鉄棒がそれひとつつずつある、じぐじく小規模なところだ。

そして、ただいま千之助は慰めっぽいことを口にしてコンマ一秒で冷静に突つ込まれたところだつた。言葉を操つて丸め込むのが職業のような弁護士なんでものをやつているおかげか、コイツ変なところで無駄に才氣走つた真似するよな、と一気に脱力する。

阿久津はどうやら千之助に先に名乗られたことで思いつきり落ち込んでいるらしい。それにしても、たかがそれだけで最寄りの公園のベンチでうなだれるまでになるのだから、つくづく頭の良い奴の

考える」とは分からんと思ひ。

「くつそ、一生の不覚だ。よりによつてこんな無氣力自堕落無感性を顔にでかでか書いてるやつなんかに……」

「オイ、ちょ、待てオイ」

「死んでくんねーかな、ほんと」

「オイイイイイイイイ」

俯いた頭はそのままに、目だけをこちらに遣してポツリと阿久津は呟く。なぜにそこまで言わねなればならんのか、タンマをかけた千之助に、阿久津は半ば逆ギレた。

「ふざけんなよー。名乗り忘れたんだぞ！ 弁護士なんていう顔と信用が商売のこの業界で！ これがどれほどの意味を持つか分かつてんのか！？」

「いや全然」

「それだよー」

狙つてやるとか同業者とかだつたらまだ諦めもつくものを、ド素人かつ無意識の行動でしたつて、おまえ俺の数年がかりで築き上げた自負その他諸々舐めてんのか！？

「いやそれただの難癖、」

「決めた」

言ひさした千之助を、阿久津はやけに清々しい声で遮つた。清々しそうに嫌な予感がする。つーかこれついさつきもあつたよつな。野生の本能が警鐘をこの上ない勢いで鳴らすので、立ち上がる。立ち上がる、ろつとした、が。

「何が何でもおまえ、父親探せよ

肩にめちゃくちゃ負荷をかけられてできませんでした。

ひどい絶望感の中、千之助は阿久津の最後の良心に賭けてみる。  
頼むよ、コイツだって生まれたときは清らかな赤ん坊だったんだぜ  
……！

意を決して、訴えてみた。

「どこ行った俺の人権ー」

「知るか

結果。とりあえずコイツ気遣った十日前の俺、バルス。

## こののよさ（後書き）

弁護士は干之助の勝手なイメージです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3623z/>

---

コンビニ！

2011年12月16日23時46分発行